

# アトリエ 琉游舎 だより 102号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年4月7日発行

## 灌仏会 花まつり

- 灌仏会（かんぶつえ）は日本では花まつりと呼ばれることが多い4月8日のお釈迦様の誕生日のことです。他にも宗派によっては降誕会（ごうたんえ）、仏生会（ぶっしょうえ）浴仏会（よくぶつえ）、龍華会（りゅうげえ）、花会式（はなえしき）の別名もあるようです。
- 日本では、草花で飾った花御堂の中で、甘茶を満たした灌仏桶の中央へ安置した誕生仏像に柄杓で甘茶を掛けて仏を供養し子どもの身体健全や諸願の成就を願います。その誕生仏像はお釈迦様は生まれてすぐに七歩歩き、右手で天を、左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と言ったとされている姿を表しています。この言葉、私にはとても不思議に聞こえます。
- 素直に読めば「この宇宙の中でただ私1人が尊い」ということでしょうか。生まれたばかりの赤ちゃんがすぐ歩いたり喋ったりするわけもなく、ましてやお釈迦様の教えを信じている限り、こんな傲慢な言葉は似合いません。これは神格化伝説の類いと片付けましょうか。
- 栃木県北部では桜は入学式を過ぎてやっと開花することが平年でした。今年のコリーナの開花日は私の観察では3月22日。花まつりの日にはほとんど散って葉桜になっているでしょう。
- 歌では、卒業式は「桜散る」入学式は「桜満開」の題材が多いようです。散った後に満開では時間が後先のような気もしますが、「別れと出会い」のイメージがよく現れています。
- 3月は別れの時、桜が散っていくようにみんな散り散りとそれぞれの道に散って行きます。4月は出会いの時、散っていった人達がこれからまた新しい満開の花を咲かせようと、新たな道へと集ってきます。離散と集合の両方のイメージを桜が象徴してくれているようです。
- 二年越しとなったコロナ禍の今、「離散と集合」の現実感がとても希薄になってしまいました。歓送迎会も卒業・入学・入社式も「離散と集合」を確認するひとつの通過儀礼なのです。それもままならない今年ですが、この繰り返しを年や経験を重ねるといふ事なのでしょう。「桜咲く」皆さんの集いの場であることを願って、琉游舎は4回目の灌仏会を重ねます。

<b>読書会</b> 4月13.27日 (火)	日蓮の「立正安国論」と 消息文を読みます。テキ ストもすべてご用意。	<b>居酒屋の会</b> 4月25日(日) 16時半から	<b>詩話会</b> 4月10日(土) 13時半から	<b>写経会</b> 5月9日(日) 13時半	般若心経・自我偈・観音偈の手 本を用意しています。初めての 方もすぐにできます。
-------------------------------	--	------------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	--

4/15 木	13時半	舞踏会の手帳 (129分)	ジュリアン・デュヴィヴィエ監督。未亡人となったクリスティーヌが16歳の時に書いた手帖 そこには彼女に思いを寄せた男性の名が綴られている、彼らに会おうと彼女は旅に出る。
4/22 木	13時半	夜の人々 (95分)	脱獄した青年ボウイは隠れ家で出会ったキーチと恋に落ちる。その後銀行強盗で金を手に入れ たボウイはキーチと新たな人生を送ろうとするが、、、

4月29日の映画会はお休みいたします。

5/6 木	13時半	街の恋 (104分)	フェデリコフェリーニ、ミケランジェロ・アントニオーニなど当時のイタリア映画の7人の 監督が撮った6つの短編オムニバス映画。
5/13 木	13時半	ノックは無用 (76分)	戦争で恋人を失った女性。ベビーシッターとしてあるホテルに雇われるも、彼女は精神的に 不安定な状態にあり、、、マリリン・モンローの絶妙な役作りの傑作スリラー映画。

晩秋はひと雨ごとに寒くなり木々の葉っぱを落としていきますが、初春はひと雨ごとに暖くなり雑草を生長させていきます。冬の風で北東側に吹きたまっていた枯葉はいつの間にか南風で崖の北斜面へと追いやられていきました。最近まで枯葉を片付けなくてはと気かけながらもほったらかしにしていた吹きだまりは、あっと言う間に解消です。さてこの様子を見るにつけ、冬期休戦状態だった雑草との格闘は再開するよりも放置しても時が来れば枯れるはずと諦め、雑草と共存和平協定を結んだ方が得策のようにも思えます。

梵天勸請という有名な説話があります。お釈迦様は悟りを開いたとき、その崇高な教えを人々に伝えるのは困難で教えることは無理だと断念したのです。しかしインド古来の神様梵天が、お釈迦様の前に現れ何とか人々にあなたの悟った教えを説法してくださいと懇願しました。その願いを聞き入れてお釈迦様は自分の「信」を私たちに「信ずべき」こととして語りました。この梵天勸請があったからこそ、こうして今もお釈迦様の教えを受け継ぐことが出来ているのです。しかしお釈迦様自身の「信」は彼の経験と思惟と人格の総体、つまりその存在がそのままに受け入れることの出来た彼だけの唯一無二の「信」です。ですからお釈迦様の「信」は本来お釈迦様だけの「真」なのです。その「信」を私たちが「信ずべき」こととして受け入れたとき、お釈迦様だけの「真」は、私たちにとっても「真である」ことが求められるようになりました。

ありのままの他者をありのままに受け入れるということは、他者と自己が完全に同一化するということです。僭越な喩えですが、私がお釈迦様の「信」をありのままに行うことは私自身がお釈迦様になるということです。それは不可能です。なぜなら私がお釈迦様の行いをそのままに行うことが出来ないからです。つまり同じ「信」を手に入れることは不可能だということです。「信」は各々の「行い」と一体の唯一無二のものなのです。だから私たちはお釈迦様の信行の結果（教え）を言葉を通してでしか受け入れることができないのです。それが「信」ではなく「信ずべき」こととしてお釈迦様を信じるということです。私たちはお釈迦様の「信」を「真」と受容するのではなく、万民共通の絶対的な「信ずべき」ことを不動のものにするために、お釈迦様の言葉を真であると信ずべきであることが求められました。この時お釈迦様は私たちの同行者、善友（善知識）から教祖様となりました。果たしてこれはお釈迦様の望まれたことだったのでしょうか。

仏教は歴史の中で「信ずべき」お釈迦様の言葉を次々と創出してきました。彼の説いたと言われる膨大な数の経は、ほとんどが名前を借りただけの後世の創作です。仏教は個人の創造物ではなく宇宙の大いなる真理がたまたまある人物（お釈迦様）を通して語られたに過ぎないと考えたとき、実在の人物それ自体に意味はなくなり、概念としてのお釈迦様や神格化されたお釈迦様が求められるようになるのです。そこで仏教徒が出来る唯一のことは「真であると信ずべき」お釈迦様の言葉から始めて、自分だけの「信」と「行い」を不断に実践することで「真」へと歩み続けることだけなのです。それは各々が独自の安らぎの処に辿り着くための日々を生きるということであり、ひとりひとりが仏さまになるということそのものなのです。念仏や題目や真言をいくら唱えても、仏像を拝み、厳しい修行や、布施をたっぷりしても決して仏さまになることはありません。そこでは「真であると信ずべき」ことをただ盲信して自分だけの「信」と「行い」の実践を放棄しているだけだからなのです。「信ずべき」お釈迦様の教えは仏の道の門前です。そこに止まっている限り門の先は暗闇です。しかし一歩踏み出した瞬間そこには安らぎの処が開けてくるに違いありません。

お釈迦様は生まれてすぐに七歩歩き、右手で天を左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と言ったとされています。この言葉、素直に読めば「この宇宙の中でただ私一人が尊い」ということでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんがすぐ歩いたり喋ったりするわけもなく、お釈迦様の言葉を集めた原始経典と比べて傲慢に聞こえるこの言葉は似合いません。私はこれを生身の人間であるお釈迦様を後世神格化する必要が生じて作られた伝説の類いと片付けて、納得させてきました。人格と神格の間でこの言葉はいろいろな解釈が可能です。神格派は「私だけが唯一衆生を救済できるから尊い」と言い、一方人格派は「生きとし生けるものはすべて尊い命を持つ存在である」と全存在にまで拡大解釈することもできるでしょう。彼は生まれてすぐ七歩歩いて天と地を指さしました。裸の赤ちゃんは経験も知識も何も所持しないありのままの存在です。天と地は私たちの生きる空間です。歩くことはそこで生きることです。「この世に生まれ出てありのままの日々を生きること、そのことで私は唯一の尊い存在となる」これが私の今観る「天上天下唯我独尊」です。「さあ、あなたたちも自身のありのままの日々を生きなさい。それがあなたがこの宇宙で唯一の尊い存在である証なのです。私は仏となりました。あなた方もあなただけの仏になりなさい。」「天上天下唯我独尊」はその様に語りかけてきます。門前でうろうろしている私たちを仏道の門の中に足を踏み入れるよう促すお釈迦様の言葉であり、門をくぐり自らの足で仏の道を歩み始めた瞬間から私たち自身が語りうる言葉にもなるのです。

雑草との平和協定をどう結ぼうかと思いつくうちに、雑草は日々勢いを増してきて、あっと言う間に畑は一面の雑草畑となってしまいました。慌てて鍬で掘り起こし雑草を土の中に埋める作業に入りましたが、一週間も経つと性懲りもなく土の中から緑の草が顔を出してきます。また今年もいたちごっこの繰り返しのようです。恐らく私と同じように、雑草たちも「天上天下唯我独尊」といいながら 琉游舎：戸井 出琉・恭子 せっせとありのままの日々を過ごしているのでしょうか。そう思うことが お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 私の善友であるお釈迦様の望まれたことであるならば、雑草との共存共栄 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850 も可能なはず、その思いのままに今年の花まつりを迎えます。 メール：toi10izuru@outlook.jp